

H・N・メディック北広島

制度に左右されることなく 落ち着いた環境の中で 絶対的に良い医療を提供する



H・N・メディック北広島の外観

はじめに

H・N・メディックは、1991年10月に創設された橋本内科クリニックを前身として、本院を札幌市厚別区の新さっぽろに置いている。

そしてH・N・メディック北広島は1996年に設立され、「H・N・メディックさっぽろ東」とともに、グループ透析施設の一翼を担っている。

北広島市は札幌市の南東、新千歳空港との間に位置し、クラーク博士が『ボーイズ・ビー・アンビシャス』の名言を残したゆかりの地とし

ても知られる。古くは農村として発展してきたが、近年、札幌都市圏のベッドタウンとして人口が増加し、平成8（1996）年9月に市制を施行したばかりの自然と都市機能が調和した街である。

H・N・メディック北広島は、この地域で唯一の透析施設として、長年、厚い信頼を寄せられているが、昨年、さらに進化するために施設を建て直し、12月に再オープンした。

医療を取り巻く大きな環境変化の中で、H・N・メディックの基本方針やこれまでの具体的な

取り組み、また、新たに生まれ変わったH・N・メディック北広島での今後の意気込みと展望についてお話を伺った。

取材にご協力いただいたのは、橋本史生 理事長、宮田昌伸 院長、鈴木敦子 看護師長である。

1. 医療人のプロと患者のプロを育成する

1) スタッフと患者をひとつのベクトルにリードする

「今の日本の医療制度は、医療費抑制が前提の中で『まず先に予算ありき』で決められ、スタートしていますが、これが本当に国民にいいことなのかどうか疑問があります」と、橋本理事長は切り出した。

「透析医療は日々連続した線上にあります。ある時点で医療制度や診療報酬が変わっても、その日から医療や治療が変わるのはおかしい。その場その場で右往左往するのではなく、自分たちの軸足をしっかりもつことが重要です。制度をきちんと理解し、患者さんの視点に立ち、スタッフ全員が同じ目線に立てて初めて良い医療は行えるのです。患者さんに必要な治療は、きちんと連続的に実践するというのが透析医療では重要であると考えています」。

この「H・N・スタンダード」と呼ばれている『制度に左右されない絶対的に良い医療をきちんとやる』という理念の下、橋本理事長の強力な指導力と人間的な魅力とで、スタッフ全員と患者さんのベクトルが一本となる。

「私たちが目指す『絶対的に良い医療』を行うためには、スタッフだけでなく患者さんにも協力を求めます。私たちは治療のプロですから、患者さんにも『患者のプロ』になってもらいます。患者のプロになるとは、治療への自覚と責任をもち、自己管理がしっかりできる患者さんになることです。患者さんに迎合することは全くありません。それができれば、現行の4時間

透析に必要な管理基準を遵守できるのではないかと考えています」。

このように、患者さん自身にも「きちんとやる」ことを求めるため、医療スタッフはさらに「きちんとやる」ことを要求されるが、これが信頼関係に結びつくという。また、H・N・メディックでは患者「様」とは言わない。患者さんは治療をして欲しいから病院にきているのであり、だからスタッフはきちんとやる義務があり、そこに「様」という概念は存在しないという考えである。

2) 患者さんの自己管理を美味しい食事サポート

もちろん、患者さんに自己管理を行ってもらうための配慮・サポートも怠らない。特に力を入れているという食事指導について詳しくお話を伺った。

「透析施設を始めた頃は、まだ食事を出せない状態でした。やっと自前で食事を出せるようになった時、美味しい透析食を作りたいくて、まず栄養士に相談しましたが、彼らは料理のプロではないので無理でした。そこで、プロの料理人を透析食のシェフとして採用し、以後、試行錯誤しながら食事を提供しています。単価は多少高くなりますが、患者さんも家族の方も美味しいと喜んで食べてくれますし、その中で自己管理指導や食事指導を行った結果、カルシウムやリンの管理も良好です。美味しい治療食は患者自身を自立させ、非透析日の自己管理にもつながる大切なものであると考えています」。

実際、壁に貼られている食事メニューを見たが、とても治療食とは思えない多彩な内容で、美味しそうなメニューがずらりと並ぶ。

「一昨年は札幌市内のホテルの会場を借りて、



橋本史生 理事長

患者さんや家族の方に集まっていただき、透析食のクッキングセミナーを行いました。当院シェフを講師として、食事の味付けや料理方法、量の目安など、ポイントを説明しながら実際に調理し、その様子を皆さんに見ていただきまし

た。かなり好評でしたので、またやりたいと思っています。当院では、当院の透析食をとらなくても自前で準備できる患者さんを『卒業生』と呼んでいるのですよ。

透析食のクッキングセミナー



シェフによる調理実習風景。実際に手元を見せながら説明を行いました。調理後は、試食を行い、実際に見た目と味を体験してもらいました。



H・N・メディックの厨房スタッフが自己紹介。



ご家族の方に向けて、リンやカリウムのわかりやすい説明や、歴代のメニューを掲示しました。



スライドを用い、患者さんの食事に対する疑問について管理栄養士が説明したり、クイズ形式で理解を深めました。

3) 働く者の思想を具現化する新病院

橋本理事長の強いこだわりが随所に見られる新病院は、一見病院とは思えない。今までにない素敵な病院を建てた想いを橋本理事長に伺った。

「一言で言う『進化する建物』を建てなかった。真四角で従来のような白い建物を建てるのは簡単ですが、次に繋がり進化する遺伝子を組み込んだ建物にしたかったのです。もし自分が患者だったら、あるいは家族が腎不全だったら、この病院に通っていることに胸を張って言えるような病院にしたい。この建物の中に入ると患者もスタッフも知らず知らずのうちによい方向性をもった存在になるようにしたい。また、中で働いている人が快適に効率よく動けるためには、建築デザインとともに機能も重視すべきだと思っています。ですから、この病院の建築コンセプトには随分こだわりました。

いい建物ができたのは、一つにはいい設計士さんと巡り会えた事があげられます。設計士さんとはそれまで全く面識はなかったのですが、彼の設計したものをインターネットで検索し、直接交渉して北広島市の病院の設計をお願いしました。もう一つの理由として、難しい設計を実際に作り上げる技量をもった建設会社の努力があったことでした。従来の病院のように管理す

る側から見たタイプの設計は嫌でしたから、この建物は空間をいかに創造するかということに気を遣ってもらいました。こちらのこうして欲しいという要望を妥協することなく、三者でディスカッションを積み上げてまさに創造したのです。わたしの絶対的いい医療を構築するというポリシーを、建築場面に置き換えただけで本質は何をもってしても同じと学びました」。

橋本理事長が話す通り、外観のデザインだけでなく、ガラスを多用して外光が多く取り入れられた室内はとても明るい。透析室の天井は高く、波のような曲線を描き、フロアに飾られた大きな観葉植物や窓の外に見える木々はやさしい安心感を与えてくれる。

「建物ができあがっても計算通りにはいかないもので、いろいろ不具合が出てくるものです。それをどうやって解決するか、例えば空調に関しては、温度データをとって、家具を移動したりしていろいろと試してみました。大きなハード部分は変わらないので、『どう運用・管理するか』『どう使うか』というソフトの部分を、北広島 鈴木秀和事務長がずいぶん頑張ってくれています」。

新病院を背景に、今後の展望についてお聞きした。

「絶対的に良い医療を行うための良い建物が



サロンを望むH・N・メディックの外観



観葉植物が見えるゆったりとした透析室

できあがりしました。今後は、この建物に負けない医療をやってもらわないと困ると、常々スタッフには言っています。絶えず連続性があり、進化していかないと意味がない。ここは次へのステップの通過点なのです。目標に到達する上での障害を取り除くのが私の役目です。管理職員は患者さんの利益のためにスタッフのベクトルを合わせ、彼らが何を考えどうして欲しいのかを把握して、導いていくことが役目です。一旦受け入れた患者さんには心底尽くしていきたい。『今は、去年よりいい医療をやっている』と自信をもって言えるように、優秀な若いスタッフ達や患者さんが共に成長していく姿を見るのが楽しみです」と、やさしい笑顔で話を終えた。

2. 新病院が可能にする医療

1) 患者さんをよく知り理解する

進化する建物を得たH・N・メディック北広島。建物に負けない医療への取り組みを探るべく、院長の宮田先生にお話を伺った。

「現在40ベッドで、スタッフは院長、看護師長、看護師8名、臨床工学技士2名、看護助手職2名、事務職3名、厨房職4名、環境整備職1名の総勢22名です。診療体制は、月・水・金は日中と夜間、火・木・土は日中のみ透析を行っています。1997年当時、31名だった患者さんは、現

在72名まで増え、その平均年齢も55.7歳から65.8歳とかなり高齢化が進んでいる状況です。60歳以上の患者さんの比率は75.5%ですから4人のうち3人に該当します。もっとシビアな話をしますと70歳以上が46%と約2人に1人が相当しますので、当然ながら臨床ではいろいろと問題が出てきます。例えば、患者さんを指導しようとしても共通の言葉が見つからない場合があります。これは極端な話ですけど『お水を飲みすぎではいけませんよ』と言うと、『ではジュースを飲みます』という会話になってしまふ。これではお年寄りの生活指導は到底難しいだろうと思い、患者さんを理解して、患者さんの視点で医療が行えるために、毎年テーマを2〜3題決めて調査や検討を行い、研究会や学会で発表を行っています」。

実際にどのようなテーマで調査や検討を行ったのか、詳しくお話をお聞きした。

「当院の看護師のほとんどが家庭をもった、いわゆるママさん看護師なので、実は、勉強会をするのも大変なのですが、2003年暮れに私がこの病院に赴任した時から、お年寄りの生活スタイルに合わせた生活指導を行っていかうということで、2004年10月にはお年寄りの食生活に合わせたリン吸着剤の服用方法の工夫、2005年5月には患者さんの睡眠状況の調査を発表しました。透析施設でも睡眠薬を使いますが、調査を行って意外と年配の患者さんは睡眠薬を使用しなくとも十分睡眠をとっていることがわかり、患者さんへの睡眠薬の服薬指導を考え直すようになりました。また、お年寄りの運動をテーマに発表も行なっています。通常、運動することで貧血や血圧の改善が期待できますが、70歳以上のお年寄りにウォーキングやジョギングは現実的ではありません。お年寄りが家で一体どのくらい体を動かしているのか、家事をどのくらい行っているのか、透析導入前に比べてどのくらい運動量が減ったか等、実態を調査しました。この調査では、家族と細かく連絡を取り合う必

要があり、ママさん看護師ならではの細やかな配慮や調査がとても役立ちました。その次の年は、お年寄りの健康に対する意識やサプリメントの服用について調査し、これらの成果は現在、生活指導に役立っています。私が赴



宮田昌伸 院長

任してから4年経ち、当院の患者さんは1996年の開設当時から平均年齢が10歳も高齢化していますが、今でも元気に通院しています」。

2) お年よりのライフスタイルに合わせた治療

このように、お年寄りの患者さんを良く知り、理解しようとする努力を続けるH・N・メディック北広島であるが、まだまだ課題は多いという。

「患者さんたちの中には、週3回病院に通い、月2回血液検査を行っているので、病気に対する必要なチェックは全て行っているから『他の病気になるはずはない』と思っている方がいます。しかし実際はそうではありません。もちろん一般的な腫瘍マーカーの検査や胸部X線写真の入念なチェックなど、透析だけでなく悪性疾患を中心とした病気全般について、スタッフも私も気をつけるように心がけています。一方で、子宮がんや乳がん、あるいは、消化器がんの全てをスクリーニングすることは不可能で、がん検診などを積極的に利用するよう指導しています。近年高齢者で増加している大腸がんなどは、こまめに便潜血検査をすることで、昨年は腺腫内がんを含む4名に根治手術を行うことができました」。

お年寄りのライフスタイルに合わせた治療を進めていく一方で、透析の合併症対策についてどのように考えられているのか、宮田院長にお聞きした。

「例えば、心臓については冠動脈スクリーニ

ングを行い、カルシウム、リンの基準についても年配の人だからといって緩めたりしないことが大切です。好きなものを好きだけ食べて飲んで、5～6時間の長い透析をして質と量をかければ維持は可能かもしれませんが、しかし、時間にこだわっているわけではないのですが、これが本当の透析のあり方なのか疑問をもっています。あくまで基本的な4時間透析を行ったうえで、非透析日にいかにセルフコントロールをしながら病と立ち向かうか、これが自己管理の第一歩であると考えています。その考えが患者さんにもかなり浸透してきたのか、透析不足で困る症例はありません。まず、透析時間を延長する前に、透析以外でできることを見落としていないか、やり残していることはないか、当院の看護師は、患者さんの裏側に抱えている問題点や課題を私と同じように考えてくれています」。

3) 今後の課題

「当院はお年寄りが多い分、そのご家族の方への対応や連絡をとる必要が他施設に比べると非常に多い状況です。家族の方の中には身内の患者さんでありながら、ヘルパーやソーシャルワーカーに任せ切りにしており、病状を把握していないケースも少なくありません。一人暮らしの患者さんの方にはそのご家族に手紙を書くなどして、今後もしっかりとした連絡をとるようにしていくつもりです」。

宮田院長は、最後に新たな課題も指摘する。

「これから先、社会の高齢化に伴い、認知症の患者さんが増加する傾向にあります。いくら治療戦略を立ててもそれが伝わらないということも考えられ、何か別の戦略をもっていないとそういう人たちを置き去りにしてしまうのではないかという懸念を、もう一つの大きな課題として捉えています。加えて、患者さんを支えるご家族の高齢化の問題もあり、今までのように連絡をとっていけるのか難しい問題です。H・N・メディックの3施設とも同じような診療を実

施していますが、特に当院はお年寄りが多いので、耳元に歩み寄りしっかりと話をして理解し合えるように、その分診療時間をかけています。若い方に比べて時間はかかりますが、その時間がお互いの信頼とよりよい成果につながると考えます」と、建物に負けない医療への意気込みを語ってくれた。

3. 患者さんの満足を満たすために

1) 患者さんのためにできること

新しい施設になったことで、患者さんの反応や中で働く者の意識や行動に変化があったかどうか、鈴木敦子 看護師長に伺った。

「透析室は天井が高く、ベッド間隔が非常にゆったりとしています。ですので、他の患者さんには聞かれない話でも、話しやすい状態を作りだしています。そのせいか前よりもスタッフが患者さんと話をする時間が長くなりました。ゆったりした空間ですので、3～4時間という透析時間を過ごすのにはとても快適だと好評です。透析後には、サロンで一面のガラス越しに外を見ながら食事ができます。5月は桜を見ながらゆったり食べられる、お迎えのご家族からも、観葉植物や外を眺められる空間で待つ時間もゆったり過ごせるとの声をいただき、大変嬉しく思っています」。

患者さんに一番身近に接する看護師の方から見て、透析医療の問題や課題は何かをお聞きした。

「患者さん、更に支えるご家族の方も年々高齢化しています。自己管理の重要性を理解してもらいたくても、週3日も通院しているのだから、しっかりと病院が診てくれていると任せきりにされるご家族も少なくありません。そこで、ご家族の方々に来院していただき、今の患者さんの状態をお知らせしたり、患者さん自身のライフスタイル等を聞き出すために連絡を密にとるよう心がけています。また、患者さんの状態（認知症など）によっては、ご家族との連

絡ノートを利用して、患者さんの問題点や注意点、アドバイスを書いています。このようなやりとりをこまめに続けることで、ご家族の協力が得られるようになりました。ご家族の協力が得られない場合は、ヘルパーさんと同様のことを行っています」。

他に患者のプロを育成するために取り組まれていることをお聞きした。

「患者さんの生活スタイルや生き方などから指導していくのはH・N・メディクの基本方針ですから、それを踏まえて患者さんをどう診ていくのか先輩の看護師さんと相談しながらやっています。カンファレンスでは、患者さんとのコミュニケーション成功例や問題点等を題材にディスカッションを行い、みんなで共有するようにしています。また、この病院に勤務して、先生に言われたことだけをやっていれば良いという姿勢から、今は先生に何う前に、患者さんは何を考え、患者さんに何が起きているのか、自分はどうすれば良いか、先生に対して自分の意見を述べるようにしています」。

2) 患者さん自身が改善策を見出す

続けて、患者さん自身に取り組んでいただくことがあるか、鈴木看護師長にお聞きした。

「身の回りの世話をしてくれているお嫁さんが作ってくれた食事を残すのは悪いので、無理して全部食べてしまうとといったような、実は先生に言えない相談も看護師は多く受けます。このような患者さんのちょっとした相談を見逃さないようにコミュニケーションをとるためには、患者さんの日常生活の状態について、まず耳を傾け聞き入る努力を惜しまないことです。コントロールがうまくいっていない患者さんに対し



鈴木敦子 看護師長



H・N・メディック北広島 スタッフの皆さん

ては、こちらからこれがいけない、あれがいけないと言いつけるのではなく、出来る限り患者さん自身に、今一番何が問題かを話してもらい、それをどのように改善するのか、どこまでを目標に改善するかを話し合うようにしています。以前は、指導という観点からだけでは飲食の情報収集などは限界がありましたが、押しつけでなく、患者さんの年齢やライフスタイルなどを見ながら、双方で話し込んでいくうちに、患者さん自身が大きく変わってきました。例えば、以前はこちらから話しかけなければ口を閉ざしていた方でも、患者さんの方から非透析日の何がいけなかったのかを話してくれるようになりました」。

3) これからの目標

今後、患者さんのために、お考えになっている取り組みをお伺いした。

「ご家族以外に患者さんのサポート役をしていただいているヘルパーの方に、透析医療のことや非透析日の過ごし方などについて説明や栄養指導をできる機会をもちたいと思っています。そうすることにより、患者さんへの関わり方、接し方がまた一步変わっていくのではないかと期待しています。また、仕事を続けたいのに、週3日の透析の事を職場に理解してもらえず、

就業を断念せざるを得ない状況の方もおられます。透析患者さんに関わる多くの人に、透析医療について理解してもらいたいと思います。これからも、H・N・メディックの門を叩かれた患者さんに対しては、常に全力で尽くしたいと考えています」。

こだわりが一杯詰まったこの素敵な施設が、今後、意欲的なスタッフと共にますます進化していく姿をはっきりと思い描ける言葉であった。

【取材後記】

今回の取材で一番に感じたことは、「私が患者だったらこの病院に通院したい」という思いである。清潔感とやさしさ溢れる素敵な建物の随所に、透析時間をいかにゆったりと充実した気持ちで過ごせるか、という患者さんへの配慮がなされており、また、患者自身の自立に向けての親身な指導の裏にある、医療スタッフ側の熱い想いとたゆまぬ努力を伺い、この病院だったら自分を任せて安心、と強く思った。

意欲的で優しい医療スタッフに、時には厳しく指導され、時には励まされながら自己管理がしっかりできる『プロ』に成長させてもらえる患者さんは、とても幸せだと感じる。透析患者が高齢化する中、この病院の患者さん達は、これからも透析患者であることを大きなハンデとせず、元気で活き活きと生活していくことだろう。